

会津沼田街道：片品（群馬県）から

会津沼田街道は、現在の福島県と群馬県の県境にある山々と高原を、約 16km にわたって縫うように走る歴史的な街道です。江戸時代（1603～1867）、この街道は、沼田藩（群馬県）の片品村と会津藩（福島県）の檜枝岐村との間を結ぶ主要な交通路および交易路でした。このルートは大清水登山口と七入登山口のどちらからでも歩くことができます。道に沿って広がるこの印象的な景観は、尾瀬国立公園の一部です。

商業と産業の遺産

群馬では、この道はその行き先にちなんで会津街道と呼ばれていました。1590 年に沼田藩主の真田信之（1566～1658）によって開設されたと考えられています。塩や油などの商品を運ぶ商人たちは、片品の戸倉にある関所を通過しなければなりません。彼らはそこから街道を歩いて尾瀬沼の岸近くにある三平下で交易を行うために旅を続けました。20 世紀には、会津街道の山間部で鉱業や林業が発展し、この地域の経済的な柱となりました。

会津街道沿いの自然の特徴

会津街道は片品から、9,100 ヘクタールに及ぶ山岳地帯、戸倉山林へと続きます。この落葉広葉樹林には、ブナ、ミズナラ、トチノキが生き茂っています。尾瀬沼は、三平峠のすぐ先の

群馬県と福島県の県境に位置しています。湖の西側には、日本最大の高層湿原である尾瀬ヶ原が広がっています。この高原は植物の高山生息地であり、黄色い花を咲かせるニッコウキスゲなどが見られることから、ハイカーや自然愛好家、植物学者に人気の目的地となっています。尾瀬沼の北には燧ヶ岳（2,356m）があります。これは本州北東部の東北地方でも高い山です。

尾瀬：環境保護のシンボル

植物学者や芸術家、そして熱心な地元住民を含む文化人たちは、20 世紀に出版物や展示会、市民運動を通じて尾瀬を観光地として確立するのに貢献しました。彼らの中には、大規模な開発プロジェクトから土地を守る取り組みを率いた人々もいました。1960 年代から 1970 年代にかけて、観光の影響を軽減し環境を保護するためのいくつかの取り組みが実施され、それらは現在も続いています。その結果、尾瀬という名前は日本において保護活動の代名詞となりました。